

# 磯部の若葉

岡本綺堂

青空文庫



今日もまた無数の小猫の毛を吹いたような細かい雨が、磯部の若葉を音もなしに湿ぬらしている。家々の湯の烟けむりも低く迷っている。疲れた人のような五月の空は、時々薄く眼をあいて夏らしい光を微かすかに洩もらすかと思うと、またすぐに睡ねむそうにどんよりと暗くなる。雞にわとりが勇ましく歌つても、雀がやかましく囀さえずつても、上州の空は容易に夢から醒めそうもない。

「どうも困ったお天気でございます。」

人の顔さえ見れば先まずこうというのが此頃このごろの挨拶あいさつになつてしまった。廊下ろうかや風呂場で出逢う逗留の客も、三度の膳を運んで来る旅館の女中たちも、毎日この同じ挨拶を繰返している。私も無

論その一人である。東京から一つの仕事を抱えて来て、ここで毎日原稿紙にペンを走らしている私は、他の湯治客ほどに雨の日のつれづれに苦まないものであるが、それでも人の口真似くちまねをして「どうも困ります」などといっていた。実際、湯治とか保養とかいう人たちは別問題として、上州のここらは今が一年中で最も忙がい養ようさん 蚕季節で、なるべく湿ぬれた桑の葉をお蚕こさま様に食わせたくないいと念じている。それを考えると「どうも困ります」も決して通り一遍の挨拶ではない。ここらの村や町の人たちを取っては重大の意味を有もっていることになる。土地の人たちに出逢った場合には、私も真面目まじめに「どうも困ります」ということにした。

どう考えても、今日も晴れそうもない。傘をさして散歩に出る

と、到る処ところの桑畑は青い波のように雨に畑はたけっている。妙義みょうぎの山も西に見えない、赤城あかぎ榛名はるなも東北くもに陰くもっている。蓑笠みのかさの人が桑を荷になつて忙がしそうに通る、馬が桑を重おもそうに積んでゆく。その桑は莖むしろにつつんであるが、柔かそうな青い葉は茹ゆられたようにぐったりと湿ぬれている。私はいよいよ痛切に「どうも困ります」を感じずにはいられなくなった。そうして、鉛おんのような雨雲を無限のろに送り出して来るいわゆる「上じょう毛もうの三名山」なるものを呪のろわしく思うようになった。

磯部には桜が多い。磯部桜といえは上州の一つの名所になっていて、春は長野や高崎前橋から、見物に来る人が多いと、土地の

人は誇っている。なるほど停車場ていしやじように着くと直すぐに桜の多いのが誰たれの眼にも入る。路傍みちばたにも人家の庭にも、公園にも丘にも、桜の古木が枝をかわして繁っている。磯部の若葉は総て桜若葉であるといつてもいい。雪で作ったような白い翅つばさの鳩の群が沢山に飛んで来ると湯の町を一ぱいに掩おほっている若葉の光が生きたように青く輝いて来る。護謨ごむほうずきを吹くような蛙かわずの音が四方に起ると、若葉の色が愁くもうるように青黒く陰くもつて来る。

晴つかいの使として鳩の群が桜の若葉をくぐつて飛んで来る日には、例の「どうも困ります」が暫しばらく取払われるのである。その使も今日は見えない。宿の二階から見あげると、妙義道みょうぎみちにつづく南の高い崖がけ路みちは薄黒い若葉に埋うずめられている。

旅館の庭には桜のほかあおぎり えんじゆに青梧と槐とを多く栽えてある。瘦せやた梧きりの青い葉はまだ大きい手をひろ拵げないが、古い槐の新しい葉は枝もたわわに伸びて、軽い風にも驚いたようにふる顫えている。その他には梅かえでと楓つつじと躑躅と、これらがよりあつま寄り集つて夏の色を緑に染めているが、これは幾分の人工を加えたもので、門を一步出ると自然はこの町の初夏を桜若葉いろどで彩ろうとしていることが直すくに首肯うなずされる。

雨おやみが小歇になると、町の子供や旅館の男ほうきが箒たいまつと松明たいまつを持つて桜の毛虫を燐やいている。この桜若葉を背景にして、自転車を通る。桑を積んだ馬が行く。方々の旅館でたたみ畳替かえを始める。逗留客が散歩に出る。芸げいしや妓やが湯にゆく。白い鳩えが餌えをあさる。黒い

燕が往来中で宙返りを打つ。夜になると、蛙が鳴く。梟が鳴く。  
門附の芸人が来る。碓氷川の河鹿はまだ鳴かない。

おとしし  
一 昨年おとししの夏ここへ来た時に下磯部しもいそべの松岸寺しょうがんじへ参詣さんけいしたが、  
今年も散歩ながら重ねて行つた。それは「どうも困ります」の陰くも  
つた日で、桑畑ふいを吹ふいて来る湿つた風は、宿の浴衣ゆかたの上にフランネ  
ルかさを襲かさねた私の肌かみに冷々ひやひやと沁しみる夕方であつた。

寺は安中路あんなかみちを東に切れた所で、ここら一面の桑畑さんげが寺内じないまで  
よほど侵入しているらしく見えた。しかし由緒こそつある古刹こせつであるこ  
とは、立派な本堂と広大な墓地とで容易に証明されていた。この  
寺は佐々木盛綱ささきもりつなとおおのくろべえと大野九郎兵衛との墓を所有しているので名



高い。佐々木は建久のむかしこの磯部に城を構えて、今も停車場の南に城山の古蹟を残している位であるから、苔の蒼い墓石は五輪塔のような形式で殆ど完全に保存されている。これに列んでその妻の墓もある。その傍には明治時代に新らしく作られたという大きい石碑もある。

しかし私に取っては大野九郎兵衛の墓の方が注意を惹いた。墓は大きい台石の上に高さ五尺ほどの楕円形の石を据えてあつて、石の表には慈望遊謙墓、右に寛延〇年と彫つてあるが、磨滅しているので何年か能く読めない。墓の在所は本堂の横手で、大きい杉の古木を背後にして、南に向つて立っている。その傍にはまた高い桜の木が聳えていて、枝はあたかも墓の上を掩うように大

大きく差出ている。周囲には沢山の古い墓がある。杉の立木は昼に暗くするほどに繁っている。『仮名手本忠臣蔵』の作者竹田出雲たけだいずもにおのくだゆうに斧九太夫という名を与えられて以来、殆ど人非人にんぴにんのモデルであるようにあまね拾く世間に伝えられている大野九郎兵衛という一個の元禄武士は、ここを永久の住家すみかと定めているのである。

一昨年初めて参詣した時には、墓の所在ありかが知れないので寺僧に頼んで案内してもらった。彼は品の好い若僧にやくそうで、色々詳しく話してくれた。その話に拠よると、その当時この磯部には浅野家所領の飛び地が約三百石ほどあった。その縁故に因よって大野は浅野家滅亡の後のちここに來て身を落付けたらしい。そうして、大野ともいわず、九郎兵衛とも名乗らず、単に遊謙と称する一個の僧とな

つて、小さい草堂そうどうを作つて朝ちよう夕せきに経を読み、傍かたわらには村の子供たちを集めて読み書きを指南していた。彼が直筆じきひつの手本と  
いうものは今も村に残っている。磯部に於ける彼は決して不人ふじんぼ  
望うではなかつた。弟子たちにも親切に教えた、色々の慈善をも  
施した。碓氷川の堤防も自費で修理した。墓碑に寛延の年号が刻  
んであるのを見るとよほど長命であつたらしい。独身の彼は弟子  
たちの手に因つてその亡骸なきがらをここに葬られた。

「これだけ立派な墓が建てられているのを見ると、村の人にはよ  
ほど敬慕されていたんでしようね」と、私はいった。

「そうかも知れません。」

僧は彼に同情するような柔かい口吻くちぶりであつた。たとい不忠者

にもせよ、不義者にもあれ、縁あつて我が寺内じないに骨を埋めたからは、平等の慈悲を加えたいという宗教家の温かい心か、あるいは別に何らかの主張があるのか、若い僧の心こころもち持もちは私には判らなかつた。油蟬の暑苦しく鳴いている木の下で、私は厚く礼をいつて僧と別れた。僧の瘦やせた姿は大きな芭蕉の葉のかげへ隠れて行つた。

自己の功名の犠牲として、罪のない藤戸ふじとの漁民を惨殺した佐々木盛綱は、忠勇なる鎌倉武士の一人いちにん人として歴史家に讃美されている。復讐の同盟に加わることを避けて、先君の追福と陰徳とに余生を送つた大野九郎兵衛は、不忠なる元禄武士の一人として浄瑠璃の作者にまで筆ひつちゆう誅しゅうされてしまった。私はもう一度かの僧

を呼び止めて、元禄武士に対する彼の詐<sup>いつ</sup>わらざる意見を問<sup>ただ</sup>い糺<sup>ただ</sup>してみようかと思つたが、彼の迷惑を察<sup>や</sup>して止<sup>や</sup>めた。

今度行つてみると、佐々木の墓も大野の墓も旧<sup>もと</sup>のまままで、大野の墓の花<sup>はなづつ</sup>筒<sup>づつ</sup>には白い躑躅が生けてあつた。かの若い僧が供えたのではあるまいか。私は僧を訪わずに歸つたが、彼の居間らしい所には障子が閉じられて、低い四つ目垣の裾<sup>しやくやく</sup>に芍<sup>あか</sup>薬<sup>あか</sup>が紅く咲いていた。

旅館の門を出て右の小道を這<sup>はい</sup>入ると、丸い石を列<sup>なら</sup>べた七、八級の石段がある。登<sup>あがり</sup>降<sup>おり</sup>はあまり便利でない。それを登り尽した丘の上に、大きい薬師堂は東に向つて立っていて、紅白の長い紐

を垂れた鰐わにぐち口が懸かかっている。木連格子きつれごうしの前には奉納の絵馬も沢山に懸かかっている。めの字を書いた額も見える。千社札も貼はっている。右には桜若葉の小高い崖をめぐらしているが、境けいだい内はさのみ広くもないので、堂の前の一段低いところにある家々の軒は、すぐ眼の下に連なつて見える。私は時々ここに散歩に行つたが、いつも朝が早いので、参詣らしい人の影を認めたことはなかつた。

それでもたつた一度若い娘が拜まんでいるのを見たことがある。

娘は十七、八らしい、髪は油氣の薄い銀杏いちようがえ返しかえに結むすつて、紺こんが

飛白すりの単ひとえもの衣えに紅い帯を締ひめていた。その風体ふうていはこの丘の

下にある鉱泉会社のサイダー製造に通かつてゐる女工らしく思おもわれた。色は少し黒いが容きりよう貌ぼうは決きして醜みにくい方かたではなかつた。娘は湿ぬ

れた番傘を小脇に抱えたままで、堂の前に久しく跪ひざまずいていた。細かい雨は頭の上の若葉から漏れて、娘のそそけた鬢びんに白い雫しずくを宿しているのも何だか酷むごたらしい姿であった。私は少しばらく時立っていたが、娘は容易に動きそうもなかった。

堂と真向いの家はもう起きていた。家の軒下には桑籠が沢山に積まれて、若い女房が蚕かいこ棚だなの前に襷たすき掛けで働いていた。若い娘は何を祈っているのか知らない。若い人妻は生活に忙がしそ  
うであった。

何処どこかで蛙が鳴き出したかと思うと、雨はさあさあと降って来た。娘はまだ一心に拝んでいた。女房は慌てて軒下の桑籠を片附け始めた。





# 青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「五色筆」南人社

1917（大正6）年11月初版発行

初出：「木太刀」

1916（大正5）年7月号

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 磯部の若葉

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>